

# ラオス研修報告書

医学部医学科1年  
小山倫子

12月21日から24日の3泊4日、地域枠学生としてラオスに行ってきた。ここではそこで感じたこと、学んだことを振り返りたいと思う。

・ラオスという国 最初に飛行機から降り立ったとき一番に感じたのは“沖縄に似ている”ということ。特に土地の香りというのだろうか、鼻から入る空気がおばあちゃんの家匂いによく似ていた。町の雰囲気は那覇の公設市場を昔風にした感じ。お祭りの屋台が並んでいるようだった。背の高すぎる建物は少なく、常に空が見える。今回はビエンチャンのみだったので地方の様子はわからないが、都心は交通量も多く、思っていたよりも賑やかだった。

・ラオスの子供 22日にラオスの小学校を訪問した際、たくさんの子供たちに出迎えられた。私が窓からこっそり「サバイディー」と両手を合わせると、子供たちは恥ずかしそうに「サバイディー」と返してくれた。瞳がすごくキラキラしていた。どこの国でも子供は宝物だと改めて感じた。

・ラオスの医学生 皆とても明るくしゃべりやすかったので、最初に英語のコミュニケーションがうまくいくかと心配していたことなど忘れてしまうくらい仲良くなれた。食事会でのダンスは全く知らないものばかりだったが、ラオスの学生が教えてくれて言葉の壁も忘れ、皆で楽しく踊った。今回は5年生の学生と交流したが、皆一生懸命勉強していることが話しているなかでわかった。第二外国語である英語をあんなに流暢に喋れるのもその証拠である。違う国で同じ勉強をしている仲間との出会いはすごく貴重だと思う。また機会があればぜひ会いたい。

・ラオスの食文化 麺や餅米が中心で野菜をたくさん食べるすごくヘルシーな食文化だ。私は麺や野菜が好きなのでラオスの食事はすごくおいしかった。特に学生と一緒に食べた屋台の麺は自分で好きなものをトッピングする楽しさもあり、気に入った。でもやはり日本に帰って食べたおにぎりには負けるかな。

・初めての手術見学 手術室に入るのは初めてだった。先輩や先生方が解説してくれて、状況を理解しながら見学することができた。海外の手術では通訳さんがすごく重要な役割を果たしていた。麻酔から覚めたときの「大丈夫ですよ」という一声があんなに大切なものだとは日本ではなかなか気づかないと思う。

研修に行く前はラオスという国がどういう場所か、途上国と日本の地方では何が違うのか、ということを見たいと思って旅立った。一番違いを感じたのはやはり水。常にミネラルウォーターを持ち歩く風景は日本ではなかなか見られな  
いだろう。沖縄、大きく行って日本がどれだけ衛生管理がしっかりしているか  
ということを経験して学んだ。ラオスは沖縄の田舎に似ている部分とやっぱり  
違うと感じる部分がある。同じ僻地あるいは発展途上地域にしてもそれぞれの  
文化がありたくさんの違いがある。今回、そうした各地域間での違いを感じら  
れるのも地域医療のひとつの魅力なのかな、と感じた。

最後に今回の研修は岩政学長、佐藤部長、その他旅に同行してくださった先生  
方、砂川先生をはじめとする口腔外科の先生方、私たちの面倒をずっと見てく  
れた新崎先生と桑江さん、4、6年生の先輩方、皆さんのおかげで無事に4日  
間を終えることができました。ほんとうにありがとうございました。